

4

私立日本医学校卒業生井口乗海の
戦前の看護教育への貢献

平尾真智子

健康科学大学

井口乗海（1883–1941）は警視庁防疫課の医師で、防疫活動を行なう一方、戦前期最大規模をほこる東京看護婦学校の講師を長年にわたって務めた。井口と看護婦養成に関してはすでに上坂良子氏によるすぐれた先行研究（「井口乗海と大日本看護婦協会—東京看護婦学校における看護婦養成について」医学史研究92号）があるが、今回は東京看護婦学校の同窓会誌『光明』に掲載された看護婦養成に関する指導精神に焦点をあて、分析する。井口の伝記には川上昌三『苦学立志秘伝井口乗海』と頼田島一二郎『井口防疫官：井口乗海博士伝』の2冊がある。井口は明治16（1883）年滋賀県朝日村で出生した。実家は浄土真宗の寺院である。滋賀県師範学校講習科を卒業後、尋常小学校の訓導となる。歩兵37連隊入営し、陸軍看護手となる。小学校教員免許取得後、高等小学校訓導となる。明治42年東京市本郷区にあった私立日本医学校に入学、大正2年同校卒業し、医術開業試験に合格、医師免許を取得。その後警視庁検診医員、警察医員、内務省防疫補、警視庁技師を歴任している。大正15年には警視庁防疫課長となり、昭和5年には東京帝国大学より医学博士の学位を得ている。昭和9年には日本医科大学理事、昭和15年には厚生省防疫官、厚生技師になっている。主な著書に『痘瘡及び種痘論』（昭和4年）がある。仏教では昭和3年権僧都、近江国通覚寺住職。昭和5年僧都。昭和9年権大僧都（昭和11年大僧都）。財団法人仏眼協会盲学校長。昭和15年権僧正（僧籍は大谷派本願寺）。東京看護婦学校は大正6年6月東京府知事の認可を受けた。前身は大正3年発足した1ヶ月間の短期講習会である。主催者は大日本看護婦協会東京組合（任意加入）で、看護婦会経営者が資金を出し合った。大正11年からは経営が府内370の看護婦会からなる東京府看護婦会組合連合会（大正9年発令看護婦会取締規則で看護婦会長強制加入の組織）に移った。経営母体が確実になり、府の補助金（年額5000円）を受けるようになり、警視庁衛生部の職員が講師として派遣された。学校の課程は本科、講習科、予習科があった。本科は6ヶ月間、春秋の2回募集、生徒数は100から200人で発足、大正13年には500名、校舎を新築した昭和14年には900名に増員した。講習科は2ヶ月の短期コース、予習科は毎月入学でき、2ヶ月以上の在学者を修業生とし卒業させた。看護婦規則下の検定試験受験者用大型予備校で約3万人の卒業生を出したが、新法の制定により昭和26年閉校した。井口は大正6年、東京看護婦学校の講師を委嘱され、以後死去する昭和16年までの24年間同校の看護教育に携わっている。この間に、『看護婦試験問題答案集』、『看護学教科書上・下』、『看護教科書の手引き』などを著している。このうち、『看護学教科書』は多くの版を重ねたベストセラーで、聖路加高等看護婦学校や栃木の安蘇産婆看護婦学校、広島看護婦学校でも使用されている。井口は昭和6年、同校の同窓会誌『光明』を発刊した。名前の由来は光明皇后で、第2号に井口による「看護婦の指導精神に就いて」という記事がある。井口は奈良時代の光明皇后の行いを理想とし、悲田院・施薬院・浴室について触れ、清潔・患者への接遇・忍耐勇気・報酬より満足・同情と最善の努力の5項目を指導精神とした。ナイチンゲールも同じで、光明皇后は仏教、ナイチンゲールはキリスト教の信仰に始終しており、信仰的に生きなければならぬとした。井口は戦前期の日本の最大規模の東京看護婦学校の運営、教育を長年にわたって担い、日本の看護婦養成に貢献した。看護婦を養成し世に送り出すという井口の行為は出身校である日本医科大学の「濟世救民」の理念を間接的に実行したととらえることもできる。また井口は仏教と日本史に学び、光明皇后をモデルとした看護婦養成の指導精神を提示した。